

# ダヤンカーンにおける史実と伝承

佐藤長

【要約】蒙古文献に記される有名なダヤンカーンが中国文献の何人に当り、如何なる紀年を持つかは従来諸説があつて一定しなかつた。代表的な説として、和田清、萩原淳平両氏の説をここに挙げれば、和田氏はこれをバトムンケに比定し、一四六四生れ、一四八一即位、一五三二三年死とし、萩原氏は前者の弟バヤムンケとし、一四八七即位、一五一九年死とした。しかし私見によればダヤンカーンはバヤムンケであり、一四六九生れ、一四八七即位、一五一九年死が正しい。蒙古文献は、バトムンケ、バヤムンケ、及びその後立ったボディアラクの三代のカーンの事蹟を一人の英雄に集中的にまとめたものであり、完全に伝説化したダヤンカーンを構成している。蒙古文献特に蒙古源流は伝承を集大成したものであり、歴史文献ではない。和田氏の考えは、伝説を以て歴史を整理したところに基本的な誤があつたのである。

史林 四八巻四号 一九六五年七月

## 一

一三六八年元の最後の天子順帝は大都を棄てて北方へと退避し、華かな元朝史はここに一応その幕を閉じた。しかし順帝及びその子孫と一党はタタール系モンゴルとして長くステップ地帯で活動を継続し、更には西方のオイラート系（瓦剌）の諸勢力を交えて、遊牧民族の抗争と紛乱は止

まるところを知らなかつた。ところが十五世紀の後半に至り、タタール系にダヤンカーン *Dayan qayan* なる名君が出てこの混乱を收拾し、まがりなりにも一応蒙古の統一を完成して後世の太平の基を開いた。それから後の蒙古の支配階級である諸王侯は、一部を除いては殆どがダヤンカーンの子孫であり、従つてダヤンカーンの名は近世蒙古史では不朽のものとなつた。当然ダヤンカーンの事蹟は蒙古文

獻には詳細に記され、漢文獻にも一般には歹顔哈、達延汗等の名であらわれている。しかし漢文獻におけるこれらの呼称は後代のものであり、同時代的な文獻には何れにもその名はあらわれず、通称としては前代から引続いて小王子の名が用いられ、固有名詞として把禿猛可 *pa tu mung ko*（*< Batu mungke >*）、把顔猛可 *pa an mung ko*（*< Bayan mungke >*）等の名があらわれるだけである。しかもこれらの名で呼ばれるカーンの諸紀年は、蒙古文獻に記される諸年代と非常な相違があり、調整が頗る困難な問題となっている。従ってダヤンカーンが漢史の何人に当り、どのような紀年を持つかということは蒙古史上の難問の一つとなり、今までに種々の説が行われてきた。

我が国で、この問題を最初に取上げたのは和田氏であり（和田四二五頁以下）、氏はバトムンケをダヤンカーンと見、その年代を天順八年甲申（一四六四）生れ、成化十七、八年（一四八一—八二）即位、嘉靖十一、二年（一五三一—三三）死と考定した（和田四二七—八、四三七頁）。和田氏の研究は蒙古、中国の両文獻を詳細に対照したもので、従来これは殆ど決定的な説のごとく扱われてきた。しかしこれに対し、最近

萩原氏は中国史料を中心としてダヤンカーンをバトムンケの弟バヤンムンケと見、その在位年代を弘治元年（一四八八）から正徳十四、五年（一五一九—二〇）死までとする新説を出した（萩原二三六、二五〇頁）。而して蒙古文獻の検討には他日を期したが、恐らくそれによっても大した変更は必要ではあるまいというのである。<sup>①</sup>

両氏の説はかなりの差違を含むが、最近松村氏は萩原氏の論文の批評において、萩原氏によって保留された蒙古文獻の検討を種々行い、蒙古史料からは和田説が正しく、萩原説は成立しないものとした（松村九五頁以下）。松村氏の見解はダヤンカーンの歿年を嘉靖十年辛卯（一五三二）とし（松村九九頁）、一見和田説とは異なるようであるが、その他に相違はないから、先ず和田氏と同じ説と見て差支えないであろう。

そこで結局我々は和田説か萩原説かの二者択一を迫られることになるが、実は両説とも蒙古文獻の、この際は特に蒙古源流の文獻としての性格を充分に把握しておらず、この点に注意すれば第三の説が成立する可能性があるように思われる。それは蒙古文獻のダヤンカーンというのは、バ

トムンケ、バヤンムンケの兄弟及び後者の孫でその後を嗣いだボディアラク Bodai alay の三人の事蹟を混淆して作り上げられた伝説的英雄で、そのケルンになっているのはバヤンムンケであるということである。

以下そのことを論証するが、叙述の都合上源流に述べられている諸紀年を実年代に還元することから始めたい。いうまでもなく源流の諸紀年は干支を以て表されているが、その干支に従うと、中国文献との間に種々の年代の相違が出てくる。中国文献の年代は先ず確実なものと思われるから、源流の方に誤があるということになる。事実当時の蒙古では干支による紀年法は行われず、十二支のみによる紀年法が行われていた。その実例は数多いが、明実録、野史類等にある蒙古王侯からの書信の紀年が、皆十二支のみで記されていることから証明できる。してみると源流の干支による紀年は必ずしも信憑できず、かなり修正を要するものとなり、ダヤンカーンに関する年代もこの点を充分に注意し検討しなければならぬものとなるのである。

そこでダヤンカーンの前後の時代で、源流に現れた最も確実な年代は何時であるかということから検討を始めた。

先ず最初にダヤンカーン以前の年代であるが、それについては既に和田氏の優れた研究があり、信頼するに足るので、それに拠りながら論を進めてゆこう。

## 二

ダヤンカーン以前のカーンの紀年で、源流と中国側の記載が一致するのはダイスンカーン Dayisung qayan の歿年である。ダイスンカーンが漢文献の脱脫不花王（ハトクトブ花）であることは和田氏の論証したごとくで（和田三四一頁）疑う必要はない。ダイスンカーンは源流では、壬寅（永樂二十年、一四三二）生れ、己未（正統四年、一四三九）即位、壬申（景泰三年、一五五二）死であるが、和田氏は中国並に朝鮮文献からして、宣德八年（癸丑、一四三三）即位、景泰二年（辛未、一四五二）死であることを的確に論定した（和田二六七―二七二、三三三―三三九頁）。その歿年については尚一年の差があるが、和田氏も引いている実録景泰三年九月庚子の条の、遼東の軍人徐勝が虜中より脱回しての言に、景泰二年十二月二十八日にエセン Esen がトトブハ王を殺したとあり（史料蒙古篇三、四三六頁、和田三三九頁）、二年であるこ

とは間違いなく、その日付からすれば、蒙古側が三年ととったのも大した誤とは思われない。

とにかくここで両国文献の紀年は一致するので、その後の紀年は問題なくスムーズにゆくように見えるが、実はそうはいかないのである。<sup>②</sup>

ダイスンカーンの後継者は、ウケクトカーン Ukeketu qayan であるが、漢文献では麻兒可児、馬可吉兒吉思王子等と出てくる。<sup>③</sup> この王は源流では壬申（景泰三年、一四五二）に即位し、翌癸酉（景泰四年、一四五三）に死んだことになっているが、和田氏は漢文献からこの王の擁立されたのを景泰五、六年（一四五四―一五五）と見、天順成化の際（甲申一四六四―乙酉一四六五）に殺されたものとしている（和田三六三頁）。従うべきであろうが、そうとすればウケクトは癸酉の年に歿したのではなく、それより十二年後の乙酉の年に死んだものとしなければならぬ（和田三六三―三六四頁）。恐らくもとの材料には、猿の年即位、鳥の年死とのみあり、その間にカーンの事蹟が何等述べられておらず、又述べられても紀年を付していないため、源流は十二年を脱落してその歿年を繰上げて計算したものに相違ない。

これによって次代のモランカーン Mutlan qayan（『脱思、脱谷思太子』の癸酉（景泰四年、一四五三）即位、甲戌（景泰五年、一四五四）歿も十二年繰下げて、乙酉（成化元年、一四六五）即位、丙戌（成化二年、一四六六）歿としなければならない（和田三六二―三六四頁）。

モランカーンの次に立ったマンドールカーン Mandayul qayan（滿都魯、滿魯都）も源流では癸未（天順七年、一四六三）即位、丁亥（成化三年、一四六七）死とあるが、同様に繰下げて成化十一年（乙未、一四七五）即位、成化五年（己亥、一四七九）死を事実としなければならぬ。

ところでこのように繰下げてくると些か疑問になるのは彼の年齢である。源流には彼を、壬寅（永樂二十年、一四二二）生れのダイスンカーンの弟として四年後の丙午（宣德元年、一四二六）の生れとしている。これも前からの手続からすれば、十二年後の正統三年（戊午、一四三八）としなければなるまい。而して癸未（天順七年）に即位したときは三十八歳であったという（江一一頁）。しかし前述のごとくその兄ダイスンカーン・トトブハの即位は宣德八年（一四三三）であり、父アジャイ Ajai の死は確実に、それより前

の永樂二十年（一四二二）である（和田二四〇、二六九頁）。更に

トトブハは永樂七年（一四〇九）に所部を率いて明に來降しており（和田二六九頁）、この時既に彼は實在していたのである。

すると源流に彼が壬寅に生れたという記載から最短の虎年を探すと、それは洪武三十一年戊寅（一三九八）となる。

これをダイソンの生年と認めるならば、その四歳違いのマンドールカーンは建文四年（壬午、一四〇二）生れということになる。従って彼は成化十一年には七十四歳で即位したことになる、成化十五年の死のときは七十八歳であったことになる。あり得ない年齢ではないが、遊牧民族の君主としては全く不適當と思われる程高齢であり、信ずることができない。

そこで四歳違いという点にこだわらずダイソンの生年洪武三十一年から、父アジャイタイジの歿年永樂二十年（一四二二）までの馬の年を探すと建文四年の後では永樂十二年（甲午、一四一四）があるのみである。この年生れとするならば、彼は長兄ダイソンとは十六歳違うこととなり、六十二歳の即位となるから、七十四歳の即位よりは少しく可能性が強くなる。

尤も源流にはマンドールの繼承について（江二二頁）、

モロンヘーンは嗣子なく歿りしかば、彼の叔父のアジャイタイジのオイラート・フジンに丙午の年に生れしマングダル・タイジ、癸未の年御年三十八歳にて即位したまいぬ。

と述べている。祖父のアジャイタイジを叔父としたのは誤であるが、或はオイラート出身の夫人はアジャイの死後、その子ダイソンの兄弟の何人かの夫人となり——それは別人のアジャイであってもよい——そこでマンドールが生れたのではなからうか。ここでアジャイが叔父になっているのはオイラート夫人がモランカーンの叔母の系列に來たからで、それ故にその前夫アジャイは叔父と誤られたのではないかと思う。もしそうであるとすれば、即位の際三十八歳であったのを信ずる限り、即位の成化十一年（一四七五）から数えて生年はやはり正統三年（一四三八）でなければならぬ。正統三年はアジャイタイジの死した永樂二十年より見れば十六年後であるが、オイラート夫人は前夫と別れて十六年後でも新に子を生めないこともないであろう。源流がマンドールを丙午（宣徳元年）生れとしているのはやはり十二年後の戊午（正統三年）を繰上げたものに外ならない。

以上三説を立てて検討してみたが、前の二説はともに年齢の点で不自然であるので、最後の説だけを採用したい。

この説を傍証するのは実録の成化十五年五月庚午の条に述べられているマンドールの立った事情である。即ち成化の初<sup>④</sup>のこととして（史料蒙古篇四、四二九頁）、

札加思蘭乃与衆商議、欲立孛魯忽太子為可汗、而以己女妻之、因立己為太師、孛魯忽不敢當、讓其叔滿都魯、札加思蘭乃以女妻滿都魯、而立為可汗、己為太師。

とあるが、これによればボルホ Bolghu はその叔マンドールに位を譲ったのである。「叔」とあるのは厳密な意味での叔父ではなく、広く叔父の輩行に属するものにとれば、これはそのまま右の源流の記述と一致するであろう。源流はマンドールをボルホの大叔父にしておきながら、一方では二人を従兄弟の間柄として描写している（江一一頁）。厳密に言えば矛盾した表現であるが、これも二人の間が叔甥というような近い関係のものでないことを暗示しているであろう。

### 三

さてマンドールカーンの後はボルホジノンを経てダヤンカーンに至る。この間も十二年のずれは表面的には続くから、機械的に十二年ずつ源流の紀年を下げてゆけば、紀年の問題はすべて解決されるように見える。しかし忽ちにしてこの計算は壁に突当るのである。というのは正徳初からのアルタンカーン Altan qayan に関する源流の紀年はすべて漢文献のそれと一致し、そのまま確実な年代としてそれらは承認されるからである。以下順序として、第二にダヤンカーン以後の絶対年代をアルタンカーンを中心に考えてみよう。

彼に関する紀年で最も確実なものは、彼が第三代ダライラマ・ソエナムギャムツォ Bod namus rgya mtsho と会見した時期とその死の時期とである。

第一の会見が何時行われたかについては、明史卷三三〇西番伝には万曆二年冬から八年春までの間であることを推定させる記事があるだけである。唯同じく卷三三一烏斯蔵伝には、

時有僧鎖南堅錯者、能知已往未來事、称活仏、順義王俺答亦崇信之、万曆七年、以迎活仏為名、西侵瓦剌、為所敗、此僧戒以好殺、勸之東還。

とあって、万曆七年にこの事件に係けられている。しかし実録万曆七年二月辛卯の条には、朝廷が張居正に「烏思蔵僧人鎖南堅錯」の贈物を受領することを命じ（史料蒙古篇八、三八八頁）、

僧鎖南堅錯即虜酋順義王俺答所称活仏者也、去年虜酋以迎見活仏為名、意圖西搶、因教以作善戒殺、阻其西掠、勸之回巢。

と述べて、「去年」即ち万曆六年にこのことが行われたことを示している。更に実録の異本には七年二月壬辰の条に張居正の上疏を掲げ、アルタンが紹介状を付けて転送してきたダライの書に「土虎年十二月初頭」とあったことをいう（前掲書）。土虎の年はこの際明かに戊寅万曆六年に当るものでなければならぬ。

一方源流にはこの両者の出会は実に詳細に画かれているが、これ亦戊寅の年としていて（江一四五頁）矛盾はない。更に第三代ダライの伝記を見れば、やはりそれは戊寅の年五月十五日のこととしており、ジグメの蒙古仏教史も亦、

蒙古曆としてその日付をそのまま引いているのである（外務省三三三頁）。とすれば三国の文献の間にはこの紀年については何等の矛盾がなく一致して、万曆六年戊寅（一五七八）と見ることができようであろう。

第二にその歿年であるが、実録には万曆十年二月癸巳の条に、辺臣によってアルタンの死が朝廷に報告されたことが出ている（史料蒙古篇八、四四八頁）。青木氏は武功録三娘子伝、全辺略記大同略等により、アルタンの死そのものは万曆九年十二月のことであることを論証している（青木七八頁）。一方武功録俺答伝下には三娘子の使者が九年十二月に塞上に至り、

答（『俺答』）以是月十九日卒。

と告げたという記事があるのは青木氏の断定を一層確定化するものである。ところでこれに対応する源流の記事は「壬午の年、御年七十六歳で大患にかかり」、「七十七歳にて歿した」という（江一五三、一五五頁）。壬午の年は万曆十年（一五八二）であり、これによれば享年の七十七歳は癸未の年（万曆十一年、一五八三）となろう。明かに中国文献とは一、二年のずれがあるが、その後を嗣いだセンゲドローン

カーン *Sengeg dugureng qayan* の權威の確定には多少の時間がかかっていることをこの際考慮しなければならぬ。即ち万曆十年十二月にオルドスのジノン（実はボシヨクト *Bošyotū*）を初とする蒙古の領袖がセンゲの順義王承襲の請願を出し（青木八七頁）、十一年閏二月に許可が下り（青木九〇頁）、同年五月にセンゲにその許可が伝えられた（青木九二頁）。この頃センゲはチェチンカーン *Ceciin qayan* の称号をとっていたが、その承認を明に請願して認められたのが、実録によれば十一年十一月庚寅である（青木九二頁）。とすればその通知を受けて、彼が正式にその称号を称し得るようになったのは万曆十二年甲申の初頭であったであろう。もし漢文獻に一致するような事実そのものの記録が蒙古側にあったならば、それに影響されて甲申の年に即位したとの考えは出てくる筈である。従って源流に甲申即位の説があるのも必ずしも誤とのみは考えられない。更に源流はこれを基礎としてその前年をアルタンの死に係け、大患に罹ったのをその前年と置いたとも思われるからである。しかし源流のこの項をよく読んでみると次のような筋書である。

アルタンカーンは大患に罹り、外形は瘦せ細って意識不明の状態に陥った。そのときモンゴルジン・トメット *Mongrojin tūmed* の大臣等は、ラマ教の教はカーンの病気に何等の効験がないからといって、ラマ等を殺そうとした。それを聞いてマジンジュン・ユリーホクト *Manjūci qutuytu* は、非命の死であれば薬物又は経文の力で活し得るが、時命は何人も超越することができない、しかしカーンは仏法、菩薩、カーンの三者を一体に具えた人物であるからとて経典を読み、医師をして投薬させた。その結果カーンは息を吹きかえし、大臣等が法教を毀たんとするのを責め、時命の如何ともすべからざるを説き、更に在位一年、人々を安撫して七十七歳で歿した。

この説話は寿命延引について魔術的效果を期待する当時の蒙古の支配者層に対し、ラマ僧がそれを拒否し、カーンが蘇生してそのことを再確認する形になっている。蘇生という形をとり、更に在位一年した等というのは、いわばアルタンの死に係けて、ラマ教の死生観を明かにした一つの物語であって、勿論的確な歴史的事実とは受取れない。従ってその紀年も正確であると考える必要はないであろう。漢文獻との紀年の差は一、二年であるから、とにかくこの場合は絶対年代は漢文獻のいう万曆九年と見て差支えない



のである。それより引いてアルタンの生年は、源流に丁卯の年（正徳二年、一五〇七）とあるのを（江二九頁）、そのま  
ま信じてよい。

アルタンに関する源流の諸紀年が信じられるとすると、  
遡って、その父バルスポロト Bars bolod（≡サインアラク  
Sayin alay）の紀年はどうであろうか。源流によれば、彼は  
甲辰の年（成化二十年、一四八四）生れで、壬申の年（正徳七  
年、一五二二）二十九歳でジノンとなり、在位二十年で辛卯  
の年（嘉靖十年、一五三二）に四十八歳で歿したという（江一  
二四頁）。これも亦矛盾なく受容れることができる年代であ  
る。又バルスポロトの兄弟等の生年については、源流に記  
載された限りでは、次のごとく伝えられる（前掲書）。

トロポロト	Tors bolod	} 壬寅（成化十八年、一四八二）
ウルスポロト	Ulus bolod	
トルト公主	Toriltu gungju	} 甲辰（成化二十年、一四八四）
バルスポロト	Bars bolod	
アルチュポロト	Alku bolod	} 庚戌（弘治三年、一四九〇）
オチルポロト	Wcir bolod	
ゲレポロト	Gere bolod	壬寅（成化十八年、一四八二）

ゲレトタイジ Gereu tayji 辛亥（弘治四年、一四九二）  
バルスポロトと同列であるから、これら兄弟の生年もそ  
のまま信用しておいてよさそうである。しかし長男のトロ  
ポロトの生れた成化十八年は、源流の寿命を十二年ずつ繰  
下げる限り、父親のダヤンカーンが七歳で即位した年にな  
る（後述）。如何にダヤンカーンが傑物でも七歳で子を生む  
筈はないから、ここで忽ち紀年の矛盾が生ずることになる。  
この矛盾を解くために、我々は再びボルホジノンとダヤン  
カーンの紀年の問題に立帰ろう。

さてマンドールカーンの後を嗣いだのはボルホジノン・  
バヤンムンケであるが、その生年は源流に壬申（一四五二）  
とある（江一〇五頁）。ボルホの父ハルグチュク Qaryuquy の  
生年は分らないが、その父アクバルジ Arbarji は源流に  
兄のダイスンカーンと一つ違いとなっている。ダイスは  
その死の景泰二年（一四五二）には五十四歳と見られるから、  
アクバルジは当時五十三歳であり、その子のハルグチュク  
は既に成年を過ぎていたことが充分考えられる。父がエセ  
ンに味方して兄のダイスンに背くのを諫言していることが  
らしてもそのことは肯けるであろう（江二〇三頁）。従ってハ

ルグチュクの死した年にボルホが生れたというのは（一二三頁）そのまま信じてよいであろう。

次にボルホの即位年次については源流には明記がないが、アルタントプチ Altan tobci では猪の年生れとあるから、マンドールの歿した成化十五年己亥と同年と見ることができよう。その歿年は源流では庚寅（成化六年、一四七〇）であるが、これもウケクトカーン以来のミッシングによるずれが続いているから十二年繰下げて壬寅（成化十八年、一四八二）を正しいものとしなければならぬ。而してボルホの後を嗣いだのが、愈々問題のダヤンカーンである。

#### 四

源流によればダヤンカーンはボルホの子で、名はバトムンケといい、甲申（天順八年、一四六四）に生れ（江二二三頁）、庚寅（成化六年、一四七〇）に七歳で位に即ぎ（江二二六頁）、在位七十四年で癸卯（嘉靖二十二年、一五四三）に八十歳で歿したことになる（江二二四頁）。八十歳の享年は遊牧民族としてはあり得ない程の長寿で、先ずその点からしても疑惑の念は止めがたい。しかし更に疑わしいのはその諸紀

年である。前代からの諸王の例に倣い、ここでも当然その年次は十二年ずつ繰下げなければならない。しかしそうすると即位の成化六年は成化十八年になる。ところが成化十八年は前述のごとく長子トロボロトの生れた年で、ダヤンカーンは七歳で子を生んだことになり、忽ち矛盾に突当るのである。又歿年の嘉靖二十二年は嘉靖三十四年に繰下げなければならないとすると、その後継者のボディアラクカーンの即位の年甲辰（嘉靖二十三年、一五四四）、歿年丁未（嘉靖二十六年、一五四七）、（江二二五、二二六頁）も、それぞれ十二年宛繰下げなければならないであろう。しかしボディアラクはアルタンの前半生に在世したカーンであるから、源流に記されるその紀年が誤っているとは思われない。又ボディアの即位はダヤンカーンの死後の甲辰といながら、一方ダヤンカーンの右翼鎮庄とウリヤンハ Uriyanggan 討伐との間にボディアの即位した記事があり、これによれば、恰もダヤンの在世中にボディアは即位したという見方も出てくるのである。更にダヤンの孫のアルタンカーンは嘉靖の二、三年頃から活動を始め、十年頃には既に独立した作戦行動を開始しており、それはもしダヤンカーンが在世している

ならば到底考えることのできない程の自由奔放なものである。

これらのことからして源流だけを見ても、ダヤンカーンの諸紀年は明かに矛盾を含んでいるのであるが、先ずそれらのうちその生年について確定しておこう。源流によるとバトムンケの生年は、前述のごとく甲申の年（一四六四）と出て、それはウルガ本、オールドス本A・C、満漢本ともに變るところがない<sup>⑥</sup>。それであれば彼は父ボルホジノン十三歳のときの生れとなり、少しく無理があると思われる。

一方バトムンケの即位に関して漢文献を見ると、又これが全く異った紀年を数多く出している。それらは既に和田、萩原両氏によって出されているので、ここではそれを繰返す必要はないが、重要な紀年に関するものだけを簡単に引用し説明しよう。武功録俺答伝には、

成化十八年、亦思馬因立把禿猛可為可汗。

弘治元年、虜可汗把禿猛可死、弟伯顔猛可嗣。

なる記事があるが、特にバヤンムンケは弘治以後実録に頻出し（萩原二三三―二三五頁）、その実在は全く否定し得ない。

又和田氏も挙げているところであるが、実録成化二十三年

三月癸卯の条の巡撫遼東都御史劉滹の奏に、「小王子已死」とあるから、バトとバヤンの交代は弘治元年の前年成化二十三年であろう。問題はこのバヤンムンケが何年まで在位したかであるが、実録ではその子の阿爾倫は正徳九年から十三年までは確実に在世し（萩原二四〇頁）、その子のト赤（亦克汗、*Yekhe qayan*）は正徳十六年から辺境侵入者としてその名を出してくる（萩原二四二頁）。而して阿爾倫は父のバヤンムンケより早く死んでおり（萩原二四三頁）、ト赤の即位は嘉靖元年以前であるので（前掲書）、結局バヤンムンケの死は正徳十三年から嘉靖元年までの間ということになる。萩原氏は国権の記事を利用することによって、正徳十六年十一月侵攻のト赤を既にカーンとなったものと見ているから（萩原二四四頁）、それによれば下限の嘉靖元年はその前年正徳十六年と繰上げることができる。以上を整理して見ると漢文献からは、

バトムンケ 成化十八年（壬寅、一四八二）即位

バヤンムンケ 成化二十三年（丁未、一四八七）即位

ボデイ 正徳三十一年（戊寅、一五一八―辛巳、一五二二）即位  
という紀年が得られるが、このカーン及びその在位年代は

大体において事実として何人も疑うことはできないものである。

ところが源流の方ではバトムンケをダヤンカーンとし、これらバヤン及びボディの時代は全くダヤンカーン一代のうち覆われている。ト赤の名がダヤンの後継者ボディアラクカーンであることは何人にも推定がつく。然らばダヤンカーンはバト、バヤンの何れであろうか。和田氏はこの両国文献の背馳をもって最初はいわゆるダヤンカーンなるものはバト、バヤンの二人に分けて考えるべきだとし、<sup>⑦</sup>最後にはバトだけがダヤンカーンであり、成化十八年から嘉靖の十年頃まで支配者であったと考えた（和田四三七、四四〇頁）。萩原氏はバヤンこそダヤンカーンであるとし、その治世を弘治元年から正徳十四、五年と見（萩原二二六、二五〇頁）、バトをその前代の別人としたのである。今ここに両氏の説を詳細に批判することは徒らに議論を複雑にするだけなので止め、私見を先ず述べて、必要に応じて両氏の説に言及してゆこう。方法は両国文献の年次を丹念に対比してゆくことである。

先ずダヤンカーンの名であるが、源流にはバトムンケ

*Batu mungke* といったとあるから、これは漢文献の把禿猛可そのものである。しかしその即位の年庚寅は漢文献のそれと矛盾することくであるが、前代に倣い十二年繰下げて壬寅とすると、それは成化十八年（一四八二）となり、完全に漢文献の年次に一致する。

問題は次のバヤンムンケ *Bayan mungke* である。漢文献の把顔猛可は把禿猛可の弟で成化二十三年（丁未、一四八七）兄の死について即位したことになる。和田氏は彼の存在を否定したが、萩原氏はその実在を認めている。

漢文献に幾多の徴証のある以上は我々もこのカーンの実在を認めざるを得ない。ところで和田氏がバヤンの存在を否定したのは、バヤンムンケというのは父のボルホジノンの名であるからということで、同名の子の存在を信頼できないものとしたからである（和田四四〇頁）。成程親子が同じ名であれば不便でもあり、如何にも奇怪なことのように見える。しかし源流には「ボルホジノン」という名は、マンドールが即位して後、彼バヤンに邂逅し、喜んで与えたものになっているので、ボルホの場合はその名は幼名ではなかったかと疑われるのである。つまりマンドールに会う前は、

彼はバヤンムンケといわれた時代があった筈である。一方子のバヤンムンケはマンドールの即位等のずっと前に生れているのであるから、このままでは当然親子二人がバヤンムンケを名乗っていた時代があったことにならう。しかしこのことは実録成化七年（一四七二）五月甲午の条に、平虜將軍朱榮の奏として、亂加思蘭が「李羅太子」とともに遣使入貢したことを伝え（史料蒙古篇四、二二六頁）、同年七月丙子に京師に至ったときには太子は「李羅忽」と呼ばれている（前掲書二二八頁）、又前にも引いた実録成化十五年（一四七九）五月庚午の条に（三九頁）、ベケリスン Bekerisun が「李魯忽太子」をカーンとしようとしたが、李魯忽は遠慮してその叔父滿都魯に位を譲ったとあることで氷解する。即ちボルホはマンドールの即位のかなり前からボルホタイジ *Borho Taiji* と称していたことが明かなのである。推定される事情は次のごとくである。

ボルホは生れたときにはバヤンムンケと名付けられた。しかし成年に達してからはボルホタイジと名乗った。後結婚してからバトムンケが生まれ、ついで次男が生れたとき彼は自らの幼名をとってバヤンムンケと名付けた。それから

暫くして即位問題が起ったとき、彼は辞退してマンドールに譲ったので、マンドールはボルジギン氏出身の彼を尊重して副王の意であるジノンの称号を与えた。従って源流にボルホジノンの称号を与えたとはあるのは、ジノンの称号を与えたということであって、ボルホという名まで新に与えたという意味ではない。この解釈が正しければ、親子の間でバヤンムンケと同時に名乗ったことはなかった筈で、別に不便はなかったものと考えられる。ボルホは自らの曾ての幼名を子に付けたに過ぎない。従って親子で同一のバヤンムンケであって一向差支えないのである。

## 五

しからば何故に源流はバヤンの即位を記さずにバトの在位が継続したごとく記すのであろうか。その原因には二つのことが考えられる。

第一にこの二人の兄弟カーンの即位の年齢が全く同一の十九歳であったらしいことである。源流ではバトムンケは庚寅（成化六年、一四七〇）に即位したが、これが十二年後の成化十八年（一四八二）が正しいことは前に述べた（四五

頁)。而して彼が成化二十三年に歿し、後を弟のバヤンムンケが嗣いだことは漢文献によって証明される(四四頁)。恐らくバトの死亡に関する材料の脱落があつて、二人は一人のダヤンカーンとして混同されてしまったのであろう。先の滿漢本の記事によれば、同年齢において即位した兄弟であるから(註⑥)、同一人と考えられたのは無理もないと思われる。但しこれは滿漢本の記事の出所が明確にならない限り、確実な事実決定の証拠とすることはできない。

そこで第二に、彼等の妃が誰であつたかが重要な問題となつてくる。源流によればバトムンケの妃は、マンドールカーンの妃マンドハイ・カトン Mandugai qatun がマンドールの死後、三十三歳で七歳のバトのところへ再嫁したことになつている(江二一六頁)。これはバトの丁亥出生説をとれば四歳のカーンとの結婚ということになる。七歳又は四歳のカーンが結婚するのも、何等か秘められた政略があるとするれば、全くあり得ないことでもない。しかし奇異の感は到底免れない。それなれば次代のバヤンムンケの妃は誰かという、兩國側とも全然記録がない。源流はバトをダヤンカーンとして長寿を保つたとしてゐるから、文面

の上ではその点矛盾はない。しかし漢文献によつて、事實はバトが五年程の在位で歿したとすると、ダヤンカーンの十一子はこの間に続々と生れたことになり、前に述べたカーンの子等の年代とは全く合わなくなつてくる。これは如何にしてもマンドハイ・カトンがバトの死後、更にバヤンの許に嫁したとしなければ成立することではない。このカトンは源流によつても、強い性格の持主であつたようである。生んだ子等にも優秀な人物が多く、それらの家庭状況が、二人のカーンを一人の夫、一人の父としてまとめる働きをしたのであろう。

バトとバヤンが混同された原因は他にもあるかも知れないが、少くとも右の二つは考慮のうちに一応入れらるべきものと考えられる。ところでバトの生年は、前に触れたごとく甲申(一四六四)になつてはいたが、これで果して正しいかどうか。前々からの約束に従えばこれも当然十二年繰下げて丙申(一四七六)としなければならぬであらう。しかしそうすると前にも述べたごとく長男のトロポロトは壬寅(一四八二)生れであるから(四三頁)、バトは七歳で長男を生んだことになる。これは到底あり得ることではないし、

壬寅は確實な年代で動かしがたいから、問題は、バトの生年を引下げないことである。とすれば甲申（天順八年）はやはり正しく、これをそのまま、バトの生年と見なければならぬ。天順八年であれば、彼は即位の成化十八年には十九歳であり、長男トロポロトの生年としても不自然さはないのである。マンドハイ・カトンはマンドールカインが成化十五年に死するとともに寡婦となり、十六、七年のうちに、十七、八歳となったバトと婚し、十八年にトロポロトを生んだのであろう。

右と同様にバヤンは多分十九歳位で兄の後を嗣ぎ、成化二十三年即位し、同時にマンドハイ・カトン及びその子等を自らのオルドに入れたと考えるべきである。勿論引受けた兄の子は、前掲の表からして（四二頁）、トロポロト、ウルスポロト、ゲレポロト、<sup>⑨</sup>トルルト公主、バルスポロトの五人である。

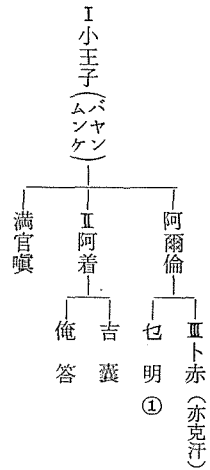
ところで曖昧なのは、バヤンムンケの歿年である。それは漢文献では正徳十三年から十六年の間と考えられ、萩原氏は更にそれを正徳十四、五年と範圍を縮めた（四四頁）。ここで思い起すのは源流にダヤンカインの死が癸卯（嘉靖二十二

年、一五四三）に係けられていることである。恐らく癸卯はもともとの材料には兎の年とだけあったものに相違なく、それをとって源流——或はその直接的材料——はこれを癸卯に当てたのであろう。ところが右の正徳十四年（一五一九）が己卯で、兎の年そのものである。これによって我々はバヤンは正徳十四年に歿したのであり、源流はそれを二十四年繰下げて嘉靖二十二年に係けたものとしなければならぬ。然らば何故源流は十二年ならともかくも、この場合に限って二十四年も繰下げてダヤンカインの死を設定したのであろうか。この疑問に答える前に、我々は歴史事実として、バヤンムンケの後カイン位が如何に継承されたかを説明しておかなければならない。

## 六

バヤンの死後のカイン位の継承を、萩原氏は皇明北虜考等の漢文献によって次の系図のごとく定めた（萩原二三九頁）。

系図のうち、長子阿爾倫は父バヤンに先立って死し、間もなくバヤンが死し、ト赤、七明はともに幼少であったので、阿爾倫の弟阿着が一時父の後を嗣ぎ、間もなくト赤が



〔系図誌〕 ①セロイス氏はセ明を也明と見、Enniの音写としている (Serrus, Genealogical Tables, p. 29)。

次いで立った。この継承の順は、和田氏も同様に見ており (和田四三—四三四頁)、疑う必要はない。唯この三汗の交代が何時頃であったかという問題については、萩原氏は国権の利用によって実録を裏付し、極めて巧に正徳十三年から十六年の間に設定した (萩原二四〇—二四四頁)。

これを源流と対照してみると、阿爾倫は長子トロポロト、阿着はバルスポロト (和田五三三頁)、ト赤はボディアアラクカインに相違ない。而してボディアアラクの紀年については、源流は甲子 (弘治十七年、一五〇四) に生れ、四十一歳の甲辰 (嘉靖二十三年、一五四四) に即位し (江一二五頁)、丁未 (嘉靖二十六年、一五四七) に四十四歳で歿したことをいう (江一二六頁)。嘉靖二十三年はダヤンカーンの歿した翌年であり、ここではバルスポロトの介在は無視され、ダヤンカーンに

直接してボディが嗣いだことにされているのである。ボディの後を嗣いだのは、その子ダライスタイジ Dalaismun tavi; であるが、彼は戊申 (嘉靖二十七年、一五四八) に即位しており、このあたりの源流の紀年の確さは既に和田氏の論証するがごとくで疑ない (和田五三一—五三三頁)。とすれば問題はやはりバルスポロトの在位が黙殺され、ボディが嘉靖二十三年に即位したことにある。この問題を解く鍵は和田氏も利用したアルタントプチであろう (和田四三三頁)。アルタントプチには次のごとくある (小林一八〇頁)。

ダヤン・ハガンの長子のトゥルッポロトはハンの位に即かずして、イバライ・タイシの手にかかつて斃れた。のちオロスの子バタイ・アラクがいとけないというので、叔父のバルス・ポロトが大ハガンの位に即いた。

そのちバタイ・アラクが左翼三万戸を取つて、八白室に跪拝して、ハガンの位に即かうと行つて、バルス・ポロト・チノに、

「貴方は私が幼いときに不法にもハガンの位に即かれたのです。今より私に跪拝なさい。跪拝されなければ、私は貴方を攻めるでせう。」



と敵しい言葉を云ふと、バルス・ポロト・ヂノンは、

「儂はハガンはこの方だと跪拝したのだ。さういふからには、そなたの〔いふこと〕は正しいのだ。」

といつて、八白室に跪拝して、ボディ・アラクがハガンの大位に即いた。

この説話は恰もバルスポロトが位を篡奪したごとく述べているが、恐らく事実を反映しているものと考えられる。

とすれば事實はやはり正徳十三年より十六年までのことと見られ、即位の甲辰は二十四年前の庚辰（正徳十五年、一五二〇）に戻さなければならぬ。武功録俺答伝上には、正

徳十六年に阿著が死してト赤が立ったことをいい（国学文庫本二二頁）、一年の差があるが、源流の十五年は、辰年をダヤンカーンの歿年に接続せしめたところから起っているのであるから、武功録の十六年を正しいものと見たい。即ち正徳十四年にバヤンムンケが死して（四八頁）バルスポロトが後を嗣ぎ、十六年になってボディが次いで立ったのである。

しかしそれにしても次のような疑問が残る。ボディが源流のいうように弘治十七年（一五〇四）の生れだとすると、父バヤンの死んだ正徳十四年には十六歳であり、叔父のバ

ルスポロトが立たねばならない程幼少ではなかつたことである。和田氏は武功録俺答伝上の、

〔正徳〕七年冬、虜汗伯顔猛哥、禪仲子阿不亥阿著ト孫、伯

顔生三子、長子阿爾倫、次阿著、次滿官噴、久之阿爾倫死、遺

二子、長ト赤、次セ明、皆幼孤、伯顔乃以阿著嗣、称小王子。

を以て、ダヤンカーンはバルスポロトに位を譲つたのではなく、右翼ジノンに任命された事柄の誤であると見た（和田四三―四三四頁）。遊牧君主が在世中に子に位を譲つて隠居する例はないし、又この頃長子トロボロトは明かに生存中であるから、これを差措いて弟の方に譲るのもおかしい。

和田氏の考えは正鶴を射たものと考えるべきである。ジノンは蒙古では副王の意味を持ち、重要な位であり（和田四三〇頁）、バルスはこれに任ぜられて隆々たる勢威を張つたのであろう。これが引いてバヤンの死後一時位に即くことになったのかも知れぬ。この状勢が、正徳七年から位にあつたとき説話を蒙古では作り上げ、中国では一つの情報として伝えられたのであろう。因にボディの年齢は、正徳七年には未だ九歳で、ジノンに任ぜられるには余りにも幼なかつたのである。

七

さて右のごとく、事実としてはバヤン、バルスポロトと嗣ぎ、ボディが正徳十六年庚辰にカーン位に即位したとすると、何故源流はこれを嘉靖二十三年甲辰まで二十四年も引伸して考えたのであろうか。勿論それはダヤンカーンが嘉靖二十二年に歿したからその翌年即位と考えたのであろうという答も、出ないことはない。ではダヤンカーンは何故二十二年己卯まで在位したとされなければならなかったのであろうか。

この問題を解くにはダヤンカーンの最後の遠征と伝えられるウリヤンハ討伐に注目しなければならぬ。源流には次のごとくある（江二二四頁）。

ウリヤンハイ・ゲゲン・チエンシャンとトガタイ・ハラ・フーラトとが首領となりてウリヤンハンの万人が反乱をおこして攻めきたりしとき、ダヤン・ハンはチャハル、カルカ二部落の人衆を率ゐて行兵し、「己が子の」バルスポロト・ジヌンに書信を送り、「バルスポロト・ジヌンはよりて」右翼三万人を率ゐる来りて交戦侵入し、すなわちウリヤンハンの万人と交戦しぬ。

……〔敵の〕先頭部隊の兵を禦ぎ戦ひてウリヤンハンの攻兵の大部隊を破り、その余衆を征服して五万人に併合せしめ、ニンダン・トゥメン〔六万人〕と称へけり。

この戦争が何時行われたかは何等記されていないが、ダヤンカーンがバルスポロトを使つたところから見れば（阿著）の即位前即ち正徳十四年以前にあつたごとく思われるであらう。しかし江氏の訳は誤があると思う。満文テキストには、「バルスポロト・ジヌンの子に書を致した」とあり（江、註二七頁一五）、漢文本にもこのように訳されているから、江氏がシュミット本によつて、「己が子のバルスポロトに書を致した」と修正したのは考え過ぎでなからうかとするとダヤンカーンが、子のバルスポロトではなく、その子に書を致したというのは当然バルスポロトが死んだ後のことではないかとの疑が起つてくる。

それはそれとして、この文に当る史料を漢文献の中に探して見よう。先ずバトムンケ、バヤンムンケの在世時におけるウリヤンハ討伐の記事は全く搜出し得ず、反て次代のボディカーンの時代にそれに該当すべき事実を発見するのである。

第一の史料は、実録嘉靖七年八月癸丑の条に、提督三辺軍務尚書王瓊の疏言の一部として（史料蒙古篇五、六五九頁）、

近扼走回軍人王毛娃子称、小王子欲驅套虜東渡、擊黃毛達子、而套虜不即去、又調取西海達子、而西海不肯從。

とある文である。黄毛達子はウリヤンハの西方にいたウリヤンハの別種で獐猛果敢を以て鳴っていた種族である（和四四五―四五七頁）。これがカーンの南下のときには、常に背後を襲って損害を与えていたのである。注意すべきは小王子ボデイが動員を下令したのに套虜が出てくることである。

明かにオルドス勢を指しており、源流の「バルスポロトの子」等を指しているものに外ならない。従って源流に「バルスポロトの子」とあるのは史実として誤っていないのである。又源流のウリヤンハ討伐は正に嘉靖七年のウリヤンハの別部黄毛達子の征討に關したものと見て誤あるまい。

しかしウリヤンハ別部の征討はこのときを以て終ったのではない。和田氏は右の文の「黄毛達子」までを引用し、匆卒に「ダヤンカーンのウリヤンハ討伐はこの頃だったかも知れない」とした（和四四五七頁）。しかし萩原氏はその後続の文を引加えて考察し、このときの征伐は失敗したと思

われるという（萩原二六五頁）。萩原氏の説くがごとくで、武功録俺答伝上では嘉靖十三年十一月に係けて、

異種黃毛倮、虜死地亡、憚三部（小王子、ジノン、アルタン）、往往擣其虛、諸虜孕重墮殞、罷極苦之、黃毛始降、自是之後、俺答移躡河套、窺我延綏、吉囊徙居山後、窺我寧夏。

とあり、黄毛の主力が降り、アルタン等が背後を脅されなくなったことを示している。又同書は嘉靖十七年十月に係けて、

〔俺答等〕約小王子、連兵寇黃毛達子、兀良罕。

という。ウリヤンハ別種に対する作戦は後に屢々行われ、決して嘉靖七年を以て終ったのではないのである。岷峨山人の訳語（紀錄彙編卷二六一、二六丁）には、

小王子集把都兒台吉、納林台吉、成台吉、血刺台吉、莽晦、俺探、已寧諸酋首兵、搶西北兀良哈、殺傷殆尽、乃以結親給其  
余、至則悉分於各部、啖以酒肉、醉飽後皆掩殺之。

とあるが、これは嘉靖七年から十三年の間に行われたものをまとめて述べているのであろう。把都兒以下が皆右翼の首領であり、アルタン、ジノン等「バルスポロトの子」の名が明記されているのは全く源流のそれに対応するもので

ある。

唯ここで遺憾に思うのは、源流にこの征戦の係年が全くないことである。しかし中国側ではそれは確に十三年を以て最高潮とする作戦であり、その前後の紀年は動かないとすれば、蒙古側においてもこの作戦はやはり十三年甲午の頃であったのは知られていたのでなかろうか。知られていなかったからこそ、ダヤンカーンの死をその嘉靖十三年の後の兎の年即ち嘉靖二十二年癸卯にかけたのではないかと思われるのである。

## 八

尤もそれにしても疑問が一つ残る。七年以後十三年、七年の作戦はボディアラクカーンの行ったものであり、それは事実として紛れもないものである。蒙古側としてもこれをボディアの事業として伝えて一向差支えない筈である。それをダヤンカーンに係けたのは如何なる理由に基くのか。この説明は容易なことではないが、一つの推測を立ててみよう。

手がかりはダヤンカーンの末子と伝えられるカルカの開

祖ゲレサンジャ Gere sanja (Gere senja) である。和田氏はゲレサンジャは末子でなくて第八子だったというが(和田七七九頁)、それはこの場合何れであってもよい。彼の事蹟に關しては、アルタントプチ、源流には殆ど記すところが無いが、シャラトウジ Sira turjuj には大要次のごとくある。

勇敢な *Kinshan* <sup>④</sup> ウダボロト Uda bolod はダヤンカーンに年毎に驃馬を殺し乾かして渡していた(『乾燥皮革を獻じていた』。彼はカーンに一子を分封されんことを請い、ゲレボロト Gere bold を与えられた。しかしゲレボロトは傲慢であつたので、それをカーンの下に返しに行き、そのとき遊んでいたゲレセンジュに目をつけ、これをハルハに連れて帰つた。ウダボロトは実子のごとくこの子を扱い、ウジエトのムンクチュイダルガ Ujyed-un mungkuui daruga の女カトンカイ Qatunggai とウリヤンハンのメンドウ Mendu の女メンタイ Mungkuin の二人の夫人と結婚させた。

ジャライルホンタイジ Jalayir gong tayji (『ゲレセンジュ』は癸酉(正徳八年、一五一三)の生れで、イェケタイゴ Yeketaygo は戊辰(正徳三年、一五〇八)の生れである。ゲレセンジュのイェケカトン、ウジエトのムンクチュイダルガの女カトンカイタイゴよりアシハイホンタイジ Asiqai gong tayji が

庚寅の年（嘉靖九年、一五三〇）に生れた。

これによれば、ゲレボロトが最初カルカに封ぜられたことになるが、彼は一四八二年の生れで、正徳の末期には相当の年齢となっており、その性格からしてカルカ（ウリヤンハの本宗）の方でも手を焼いた。そこで未だ成年に達しないゲレサンジャを連れて行ったというのである。しかしその時期が何時であったかは右の文では一向分らない。唯ダヤンカーンが在世中とすると、これは正徳十四年までのことで、彼は七歳までの間にカルカに封ぜられたことになるが、七歳は封建されるのに余りに幼少であるとすれば、彼はこのときは移住しただけで、後にボディカーンの時に封建されたと考えてもよい。とにかく右によれば彼が結婚したのはカルカに赴いてからであり、太后に長男アシハイの生れたのは、彼が十八歳、嘉靖九年庚寅であったのである。この紀年を信ずればゲレサンジャは多分嘉靖七、八年頃には正式にカルカの封建諸侯であったという推定が成立つであろう。嘉靖七年は前述のごとくウリヤンハ別部の討伐の起った年である。しかも彼がカルカに封ぜられた由来はアサラクチネレトテウケ *Asarayçi nereñu tenke* によれば、

カルカ・チノス部のヌタボロト *Nuta bolod* (= *Uda bolod*) がダヤンカーンに請い、ジャライルやケルトのシゲチン *Siğein* の圧制から免れるためにこの王子を迎えたのだという（松村九八頁）。先に引用したシャラトウジに対応する内容であるが、そうとすれば彼の受封とボディのウリヤンハ討伐との間に何等かの関連がなかったのであろうか。以下推測を交えて当時の状況を考えてみよう。

カルカの有力者ウダボロトはジャライルやケルトとの間の紛争に堪えかねてダヤンカーン又はボディカーンの方に援助を求めてきた。このことはカルカ方面が分裂して抗争を重ねていたことを示すものであろう。ダヤン又はボディはこれに答えてゲレサンジャをカルカに封ずることにした。ゲレサンジャの母はジャライル *Talayir* のフトクシグ *Qutuy sigisi* <sup>⑤</sup> の女スミル・カトン *Sumner qatun* であるから（江二七頁）、彼はダヤンカーンとカルカの両系統の血を受けているわけで、最適任者と考えられた。従って彼の封建はカルカの政局不安を解消し、その戦闘力を強化するのに役立つものであった。これを知ったウリヤンハ別種は多分にカルカに対して警戒的となった。蓋しカルカの統一は

必然的に別種にとっては東方からの圧迫を意味したに相違ないからである。ボディカーンはかくしてカルカを支持し、ウリヤンハ別種を牽制するために、嘉靖七年にオルドス並に青海の軍を別種に差向けんとした。しかしボディ自身が出動するのになかったために、オルドス、青海は動くことなく、計画は失敗に帰した。とはいふもののウリヤンハ別種の討伐は単にカルカのみの問題ではなく、内蒙古諸部落全体の問題である。何故かなれば、前述のごとくその対中国作戦のときには、彼等は屢々別種によってその背後を脅威されていたからである。

而して十三年に至り、ボディは自らチャハル、カルカの兵を率い（江二四頁）、オルドスのアルタン、ジノンの協力を得て、遂に大作戦を敢行した。ウリヤンハの東北方、東南方、南方の三方面から包囲態勢をとり、これに殲滅的な打撃を与えたのである。この戦の後アルタンが河套に根拠を定め、ジノンは山後（『賀蘭山後』）に移動することができたのは（五二頁）、確にこの作戦が成功裏に終わったからである。同時にゲレサンジャのカルカが安定し、発展するようになったのも、この戦役の結果と考えられるものである。

後代になり蒙古の人々がゲレサンジャのことを回想するとき、そのカルカへの入封とその後のカルカへの効果的なウリヤンハ作戦を、ダヤンカーンの事業と考えたのは無理もない。ゲレサンジャは若かったから、このような大きな政治的軍事的成功を齎す筈はない。アルタン、ジノン、特にアルタンは明末清初にはダヤンカーン以上の名声を獲得した政治的文化的英雄である。そのような英雄を駆使するという意味においても、ボディカーンは指導者として適わしくはない。事実ボディカーンが正徳十六年に莊浪馬場溝に侵入したときは僅か二千余騎であつたし、嘉靖二年の沙河堡に入ったときは僅か二千余騎であつた（萩原二三八頁）。又ボディは嘉靖十三年大同の叛乱軍に招かれて、「以此（『大同府』為那顔居」と言われて悦に入つた程度の人物である（和田四三六頁）。オルドスのジノンが、「小王子を并呑するの志あつた」というのも当然のことで、とにかく先代とは比較にならない小人物であつたのである。

かくしてダヤンカーンこそ、ゲレサンジャの父であり、この大規模な政戦略を遂行するに最も適わしい人物と考えられたのでなからうか。而してゲレサンジャはダヤンカー

ンによってカルカに封ぜられ、その發展の道もダヤンカーンによって開かれたという考えが導き出されたのではなからうか。その故を以てダヤンカーンの歿年の兎の年は、前述のごとく作戦の後の兎の年嘉靖二十二年とされ、彼は二十四年も實際よりは延命され、ボディの事蹟はその中に、主役をすり代えて、繰込まれてしまったのであろう。源流はダヤンカーンを在位七十四年、八十歳で歿したというが（江一二四頁）、前にも触れたごとく遊牧民族でこのような長寿は殆どあり得ないことであり、蒙古人でもこれは当然疑える筈である。それを敢て疑わなかったのは「偉大なるダヤンカーン」という先入観があったからに外なるまい。

## 九

さて以上によってダヤンカーンなる人物は、現実に存在したバトムンケ、バヤンムンケ、ボディアラクの三カーンの年代と事蹟を合揉し、蒙古側で作り出された伝説的英雄であることが判明した。しかし尚一、二の問題が残っているのでそれを付加的に述べておきたい。

第一はダヤンカーンが三カーンを合揉して作り出された

としても、一体何人を中心に作り出されたかという問題である。源流や蒙古世系譜等蒙古文献一般にはバトムンケの名を使用しているところから、バトムンケがダヤンカーンであったとの考えは当然起ってくる。和田氏等はこの見方で押通したために、中国文献のバヤンムンケの名さえ、場合によってはバトムンケの誤だと断定して史料の整理を行っている程である（和田四三三頁）。しかし実録弘治元年五月乙酉の条には（史料蒙古編四、六〇〇頁）、

先是、北虜小王子率部落、潛住大同近辺、營互三十余里、勢將入寇、至是奉書求貢、書辭悖慢、自称大元大可汗。

とあり、又同じく弘治元年九月乙丑の条には（前掲書六〇六頁）、  
迤北伯顏猛可王、遣使臣桶哈等來貢……初自称大元可汗、奏乞大臣報使、以通和好、不許。

とある。これら二つの文が、同一人の同一の朝貢を指すことは萩原氏が詳しく説明しているごとくで（萩原三三三—三五頁）、この小王子は明かにバヤンムンケである。従って大元（大）可汗 *ta yen (ta) ko zhan* 即ち *Dayan qayan* は当然バヤンムンケでなければならぬ。歴史的実在として  
はダヤンカーンはバヤンムンケ一人のみと見るべきなので

ある。

第二の問題は、右のようにバヤンムンケがダヤンカーンであるならば、萩原氏が言うごとく、その四大事業と称されるもののうち、バヤンの業績は、右翼の鎮庄のみとなる（萩原二六六頁）。とすれば何故に蒙古側はこのような業績の少い人物をその前後のカーンの事蹟を繰込んでまで偉大な支配者に仕立て上げたかということである。この問題については次のごとく考えることができるであろう。

成程バヤンムンケは想像されていた程の業績はなかったかも知れない。しかし右翼の鎮庄だけでも取上げて見るならば、これは当時の蒙古族が当面した最も重要な課題ではなかったのか。エセン以来オイラト勢力は蒙古の西半分を確保し、タタールは東方に追詰められた形になっていた。右翼を確保することは、先ずこの西方系の勢力を西北へ撃攘することではなければならない。正徳の初期に火篩 Qosya を撃殺し、続いて亦不刺 Ibara (Abraham) を青海に走らせ、バヤンムンケはオルドスを占領した。而してこのオルドス占領が、後に内蒙を支配したアルタン、ジノン等の実力派を生む契機となったのである。このことは決して些少

な業績とすることはできない。その在位年代が約三十三年であり、前後のカーンと比べてかなり長く、平和裏に死去したことも珍らしいことである。況してやその子等は各処に分封され、明末清初の、ひいては最近に至るまでの蒙古王侯の配置はこのときに大凡定まったのである。王侯等が共通の祖先として、ひいては自らの位置を作り出した大恩ある祖先としてバヤンムンケを尊崇し、偉大なカーンとして仰いだのは当然であろう。記憶或は記述において、絶対年代を決定できないことが、或は尚そのことを助けたのかも知れない。ダヤンカーンの子孫である各王府はそれぞれカーンについての説話を有していたであろう。偉大であればある程民間の伝承も当然多くなり、兄のバトムンケの業績をも含み、後にはボディアラクの事蹟までそれに集中されるようになった。偉大さが強調された結果として、このような過程を辿ったのは無理もないことと思われるのである。

結局ダヤンカーンは蒙古民族によって、或は蒙古のその後の支配階級によって作り出された英雄である。勿論材料はバヤンムンケの事蹟が中心で、当時の支配者が当面する



政治的軍事的問題をすべて処理する全能的英雄として現れた。しかしそれが完全に意識的な作為の結果であったかどうかは今軽々に判断することはできない。バトとバヤンの同一化のごときは記録の脱落による混同ではないかとも考えられる節もある。しかしウリヤンハ討伐のごときは、単なる混同や混乱ではあるまい。混同か作為かを、二者択一の原理によって整理することは困難であろう。何れも当時の蒙古人ならば当然持ち得る二つの傾向であったと思わざるを得ないからである。

和田氏はダヤンカンの歴史的研究を中国文献から始めながら、蒙古文献を利用するに当り、源流の文献としての性質を充分に究めることをしなかった。そのために明かに英雄物語と化しているダヤンカンを源流の記載そのままに史実ととって、それを以て漢文献の材料を整理した。そのため伝説を以て史実を切ることになり、反って歴史を伝説化する結果を将来したのである。萩原氏はその点徹底的に漢文献だけにより、この問題を歴史的に再構成しようと努めた。しかし蒙古文献に対する配慮を敢てなざなかったために、バトムンケ及びボディアラクの事蹟を軽く見、ダ

ヤンカンの存在を伝説的形成物として理解するまでに至らなかったのである。

私はここに第三の説を提唱して、和田、萩原両氏の説に修正乃至は否定を行った。作業は年代修正を中心としたが、源流は伝承的史書であるから、尚一、二年の誤はあるであろう。それらの精密な確定によって更に修正を加えることは、他に人もあろうから敢て行わない。

思うに私がこの説をなすに至ったのは、実は全く和田、萩原両氏の説に啓発されたからである。両氏の研究の的確な点を私はかなり取入れた。しかも尚結論は相当異ったものになったのである。和田氏は既に鬼籍に入られたが、萩原氏は現に親しい同僚である。両氏に常に学恩を受けている私にとっては、異説を立てて批評、反論を行うのは甚だ心苦しいのであるが、学問上のこととして寛恕を請いたいと思う。

尚本文の理解を助けるために、若干足らざるを他書から補って、源流の紀年を表に作成し文末に付する。<sup>⑮</sup>印は私見によって修正された実年代であり、印の付されていないのはそのまま信頼できる実年代である。

ダイスン 生 壬寅 (永樂二十年、一四三二) ↓ 戊寅 (洪武三十一年、一三九八)

即位 己未 (正統四年、一四三九) ↓ 癸丑 (宣德八年、一四三三)

死 壬申 (景泰三年、一四五二) ↓ 辛未 (景泰二年、一四五二)

ウケクト (マルクルゲス) 即位 壬申 (景泰三年、一四五二) ↓ 甲戌 (景泰五年、一四五四)

死 癸酉 (景泰四年、一四五三) ↓ 乙酉 (成化元年、一四六五)

モラン (テグス) 即位 癸酉 (景泰四年、一四五三) ↓ 乙酉 (成化元年、一四六五)

死 甲戌 (景泰五年、一四五四) ↓ 丙戌 (成化二年、一四六六)

マンドール 生 丙午 (宣德元年、一四二六) ↓ 戊午 (正統三年、一四三八)

即位 癸未 (天順七年、一四六三) ↓ 乙未 (成化十一年、一四七五)

死 丁亥 (成化三年、一四六七) ↓ 乙亥 (成化十五年、一四七九)

ポルホ 生 壬申 (景泰三年、一四五二)

即位 猪年 ↓ 己亥 (成化十五年、一四七九) アルタントプチによる。

死 庚寅 (成化六年、一四七〇) ↓ 壬寅 (成化十八年、一四八二)

バトムンケ 生 甲申 (天順八年、一四六四)

即位 庚寅 (成化六年、一四七〇) ↓ 壬寅 (成化十八年、一四八二)

死 丁未 (成化二十三年、一四八七) 実録による。

バヤンムンケ 生 戊子 (成化四年、一四六八)

即位 丁未 (成化二十三年、一四八七) 実録による。

死 癸卯 (嘉靖二十二年、一五四三) ↓ 己卯 (正徳十四年、一五一九)

バルスボロト (サインアラク)

生 甲辰 (成化二十年、一四八四) 任ジノン壬申 (正徳七年、一五二二) 実録による。

即位己卯（正徳十四年、一五一九） 推定。

死 辛卯（嘉靖十年、一五三一）

ボデイアラク 生 甲子（弘治十七年、一五〇四）

即位甲辰（嘉靖二十三年、一五四四） ↓辛巳（正徳十六年、一五二一）

死 丁未（嘉靖二十六年、一五四七）

生 甲辰（嘉靖二十三年、一五四四） ↓庚辰（正徳十五年、一五二〇）

即位戊申（嘉靖二十七年、一五四八）

死 丁巳（嘉靖三十六年、一五五七）

① 欧米でのダヤンカーンに関する最近の研究にはセロイス氏のものがあつた（Henry Serrys, Genealogical Tables of the Descendants of Dayan-qan, Hague, 1958）。氏はダヤンカーンに関する蒙古文献並に漢文献の紀年を紹介して、それらが「非常に混乱していて、兩國の記録を充分に一致させることは殆ど不可能である。」と述べている（Ibid., p. 15）。事実氏は自らの信する決定的な紀年を何等述べていないし、漢文献の利用も到底和田、萩原両氏のそれに及ぶものではない。従つてここでは氏の記述は取上げないことにする。

② ダイスンカーンはエセン太師に襲殺されたが、その経過には難解な問題がある。和田氏は実録の記事、于公奏議の中にある寧夏中護衛の余丁韓成の供状、李朝実録の明使尹鳳の言等のうち、実録の記事のみを信じ、他のものを信用せず、又源流の記事を引いているが、結局何等の整理を行っていない（和田三三四—三三五頁）。問題は次のこと提出される。

実録景泰二年二月壬午の条に、

A. 也先姉為其（『脱脱不花王』正室、有子、不立太子、而欲以別妻之子為之、也先言之、不従、乃起兵来攻也先、中道而返、于是也先追于之、戰、敗之。

とあるが、前記韓成の供状には、

B. 又聽得也先怪恨脱脱不花王、要人馬去征殺了、要着他的外甥阿八丁王的男、做王子。

とあり、一方李朝実録の尹鳳の言には、

C. 脱脱王与也先相惡、王先擊也先、也先敗、其後也先大率、攻王絀之、又殺其太子、而立太子之子、因北遁遠去、太子之子乃其妹出也。

とあって、BCの文がAの文とどう繋がるのが問題なのである。トトブハの正室はエセンの姉であるが、Aによれば、その子は太子に立てられず、トトブハ自身は別の夫人の子を立てようと欲していた。この際正室の子が正統八年から、景泰二年までの間明朝に入貢してきた「脱脱不花王男也先猛哥」でなからうかという和田氏の推定は可能性のあるものである（和田三三五頁）。しかし別の夫人の子が誰であるか

はここでは断定できない。或は後にモランカーン *Mulan qayan* となった脱谷思 *Togus* であるかも知れない。何故かなれば、脱谷思も正統四年には既に明朝に入貢しているからである（前掲書）。しかしトブハ王は「立てようと欲し」、エセンが異議を唱えても「従わなかった」のであるから、トグスを一時太子としたのが知れない。いずれにしてもこれは王とエセンの衝突の前の状態である。これとB文とが関係あるであろうか。

B文はエセンがトブハ王を殺して後のことで、その後始末は「他的外甥阿八丁的男、做王子」とある。この阿八丁は一見するとトブハの子のように見えるかも知れない。しかし和田氏が後に推定したごとく、源流のアクバルジ・ジノン *Akbarji-jinong* に音の一致しているところを見れば（和田三三六頁）、これはトブハの弟でなければならぬ。同時に多分「阿八丁的男」は、アクバルジの子ハルグチュク *Qaryuqy* であろう。とすればB文の人名は、何等A文のそれと関係ないことになる。恐らくトブハ王とエセンの衝突開始前はA文のごときものであったろう。ところが衝突した後にはトブハを滅し、その子等は逃散又は死亡してしまった。そこでエセンも困惑し、B文のごとくアクバルジの子ハルグチュクを起用して王子（『王』）となすに至ったと思われるのである。しかしそれにしても「外甥阿八丁的男」とあるからには、アクバルジはエセンと親戚関係があったのではなからうか。それを解くためにCの記載を詳しく検討してみよう。

C文ではエセンは王を殺し、太子を殺し、太子の子を立てたことになっている。この太子はトブハの王子を指しているのではなくアクバルジを指しているのである。何となればアクバルジは源流ではダイスンカーン（トブハ）が立ったときジノンにされておられ、ジノンは副王的存在であるから、外国人の尹胤がそれを太子にとったのは無理もないのである。とすれば太子の子はハルグチュクに相違なく、

「太子の子はエセンの妹の出である」というからには、当然ハルグチュクはエセンの外甥に当たるわけである。ここに至って「外甥阿八丁的男」というのは、「アクバルジの子で、エセンの外甥に当たるもの」という意味も正しく、「エセンの外甥のアクバルジの子」という意味ではないことが明瞭になる。これだけでもハルグチュクはエセンにとつては重要な存在になるが、そのハルグチュクは源流によれば、又エセンの女セチュク・ベイジ・カトン *Seqig beyji qatun* を夫人にしており（江一〇五頁）、エセンはその故に部人の反対を押えてハルグチュクを救っているのである（江一〇二頁）。C文にエセンが愛婿の彼を立てたというのは当然のことと考えられるのである。尤も源流によれば、ハルグチュクはその後トクマク（『トクマク』）の者に射殺されているから、これを信ずれば、右に彼が「立てられた」とあるのは、父の死後彼のみが後継者として残されたという程の意で、位に即けられたという意味にはとるべきではなからう。

以上のように考えればBは決して和田氏のいうような「頑愚の奴輩の伝聞」（和田三三六頁）ではなく、Cも宦官尹胤の「多くの錯誤を含んだ漫答」ではない。反て当時の実情を伝えた極めて貴重な史料といわなければならないものである。

③ 源流では *Mergesids* であるが、これは本来蒙古名ではなく、シリフ語の *Mar Giorgis* から来たものであろう。*Giorgis* の名は現に大秦景教流行中国碑にも見える（佐伯好郎「景教の研究」東京、昭和十年、六〇三頁）。ペリオ氏によればギオルギスのトルコ又はモンゴル語形は *Korguz, Gorguz* であるところから（Paul Pelliot, *Chrétiens d'Asie centrale et d'Extrême-orient*, T'oung Pao, vol. 15, 1914, p. 634）この漢名は *Mar Korguz* なる蒙古名を推測せしめるものである。明かに景教徒名であるが、麻尼可児が景教徒であったかどうかは断定できない。

④ 和田氏はこの「成化初」を、二年の意味でなく、五、六年のこととして取っている(和田三八九頁)。

⑤ Rje bsun thams cad mkhyen pa Bsod nams rgya mtshohi nam thar dros grub rgya mtshohi gin rta shes dya ba (東北目録 No. 5590), 94 b.

⑥ オルドス本 A・C に「この紀年が出ていることについては Scripta Mongolica II, Erdemiyin tobki, Pt. I, p. 4 参照」これらの紀年はシュミット本では全く異った計算が与えられている。即ちハトムンケは丙戌(一四六六)に生れ(Schmidt, p. 157)、庚寅(一四七〇)の即位だけはウルガ本、満漢本に一致しているから即位のときは五歳である。歿年は癸卯(一五四三)で七十四年在位、七十八歳死となっている(Schmidt, p. 195)。一四六六年生れとすると父のボルホが十五歳のときの子となり稍々可能性が増す。

尚参考のため弟のハヤンムンケの生年について述べておきたい。満漢本には彼は、

戊子の年ボルホジノンが二十九歳のとき生れた。

という興味ある記事が出てくる(江一一三頁)。戊子の年(一四六八)は父ボルホは十七歳であり、二十九歳は誤としなければならぬ。とすればハヤンはバトと四つ違いの兄弟となり、やはり十九歳で即位したことになる。後述のごとく兩人が混同される原因はここにあるのかも知れない。しかし注意すべきことはこの記事は満漢本のみで蒙文本には絶えて見えないということである。蒙文本にあれば、これはハヤンムンケの存在を蒙古側でも伝えていたという極めて貴重な史料になるのであるが、満漢本のみでは説得力は甚だ弱い。従ってハヤンムンケの存在は蒙古文献では現在のところ確実に証明できないのである。

⑦ 和田清「内蒙古諸部落の起源」東京、大正六年、三九頁。

⑧ アルタントプチではダヤンカーンは猪の年に七歳で即位したという

伝承を掲げている(小林一六二頁)。猪の年は己亥(成化十五年、一四七九)で、マンドールカーンが死し、ボルホジノンが嗣いだ年と考えられる(四三三頁)。これもマンドハイ・カトンが、マンドールの死後間もなくダヤンカーンの妃となったという事実の反映であると見たい。母はマンドハイではない。

⑨ この説話が源流に採用されていないのは興味深い。バルスポロトはオルドス部の開祖であり、サガンセチェン Sayang seen の祖先でもある。そのようなことからサガンは特にこの祖先の篡奪説話を忌避したのだとも考えられる。

⑩ 和田氏は「伯顔猛可は勿論把禿猛可の誤」とするが(和田四三三頁)、ダヤンカーンハバトムンケの考えでゆけばそうなるであろう。しかしこれは誤ではない。

⑪ 黄毛ウリヤンハに対する作戦は、嘉靖二十一年及び二十二年にもアルタンによつて行われた(和田七七二頁)。和田氏によれば、その事實は少しく曖昧なものようである。しかし二十二年の場合はアルタンは一部を以てこれを討っているのであるから、黄毛が既に往年の勢力を失っていたことは推測される。尚岷峨山人の訳語(記録彙編卷一六一、一七二)には、「近聞」として兀良哈が小王子に兼併されたことを述べている。訳語は嘉靖二十二、三年頃の作と見られるから(和田四六六頁)、或はアルタンの二十一、二年の討伐と関係あることと見えるが、多分そうではなくて、嘉靖十七年の征伐の結果を言っているのであろう。

⑫ H. II. Шагина, Шапа гүжү, Монгольская революция XVII века, Москва-Ленинград, 1957, p. 162-3. この文献の利用については若松寛氏の助力を得た。記して感謝の意を表するものである。

⑬ ёишунь は、松村氏によれば「チノス部の」の意味にもとれるらしい(松村九八頁)。

⑮ *sigesi* は明かに「少師」の音訳であるが、一方のシゲチン *sigetxin* も同様であろうと考えられる。しかしフトクシグシとシゲチンは同一人であるかどうかは決定できない。

⑯ 源流はバトムンケの即位について、マンドハイ・カトンが「庚寅の年にダヤン国を佔拠すべし」と彼(バトムンケ)をダヤン・ハンと推尊し、老夫人の前にて即位せしめ」とあるが(江二一六頁)、ダヤンカーンにバトムンケの前提の下に書かれているのであるから、これを以てバトが既にダヤンカーンと称したとの根拠にはならない。

⑰ ダヤンカーンの四大事業は、(一)部下の大酋イスマイルの撃破、(二)オイラートの撃破、(三)右翼の鎮圧、(四)ウリヤンハ万戸の討滅であるが(和田四四一頁以下)、萩原氏は(一)はバトムンケの事業(萩原二五一―二五二頁、又同氏「小王子に関する一考察」『東洋史研究』第十七巻四号)、(二)は中国文献では事実を証明できない(萩原二六五頁)、(四)はダヤンカーン死後のことであり(萩原二六七頁)、(三)のみがダヤンカーン・バヤンムンケの事業であるという。

⑱ 明代蒙古の王統については漢蒙両文献の外にチベット文献にも記載がある。バクサムジョンサンがそれであるが(Sun pa mkhan po,

Dpag baam lion bzah, Pt. III, edited by Lokesh Chandra, New Delhi, 1959, p. 144) その王統は源流によく一致し、又それ以上の新しい記述はないので、ここには取上げない。

〔略語表〕

- 和田 和田清『東亞史研究(蒙古篇)』東京、昭和三十四年  
 萩原 萩原淳平『ダヤン・カーンの研究』明代滿蒙史研究、京都、昭和三十八年  
 松村 松村潤『明代滿蒙史研究』批評、東洋史研究第二十三卷一号  
 江 江実訳注『蒙古源流』京都、昭和十五年  
 実録 明実録  
 史料 明代滿蒙史料(明実録抄)、京都、昭和二十九―三十四年  
 外務省 外務省調査部訳『蒙古喇嘛教史』東京、昭和十五年  
 青木 青木富太郎『センゲの順義王承襲について』東方学第十四輯  
 小林 小林高四郎『蒙古黄金史』東京、昭和十六年  
 Schmidt = I. J. Schmidt, Geschichte der Ost-Mongolen und ihres Fürstenhauses von Ssanang Setsen, St. Petersburg, 1829. (京都大学助教授)

# The State Land System in the Tenth Century and its Collapse

by

Syôzô Sakamoto

The state land system means the system starting from the reformation of land system in the tenth century including *Engi-Shôen-Seiri-Rei* 延喜荘園整理令, continuing till about the middle of the eleventh century, and intending mainly maintenance of public field, or *Kôden* 公田 contrary to private property, by *Kokushi* 国司. The public field means the succession of fields except hereditary private fields, such as *Kubun-den* 口分田 in *Kokuzu* 国園; it was not regarded as a private property even on devastation and higher rent was imposed.

*Kokushi* accepted *Kenden-ken* 検田權 from the state, and was obliged to maintain the public fields settled in the *Kijun-Kokuzu* 基準国園; then he organized *Myô* 名 within his country, which was the system for cultivating of public field and grasping people and land. Since about the second quarter of the eleventh century symptoms of dissolution appeared in that system; that is, it is considered that public field was changed into private property bearing another name, also *Myô* in the tenth century was changed.

## Historical Facts and Legends Concerning Dayan Qan

by

Hisashi Satô

The famous Dayan Qan in the Mongolian literatures was unknown with many opinions in his historical dates and Chinese name. According to the representative opinions of *Sei Wada* 和田清 and *Junpei Hagiward's* 萩原淳平, the former made him Batu Môngke (born 1464, reign 1481-1532 or 33), and the latter Bayan Môngke his brother (reign 1488-1519 or 1520). It is correct that judging from our study, Dayan Qan was Bayan Môngke (born 1469, reign 1487-1519).

Literatures in Mongol construct a great legend of Dayan Qan, by

arranging as a single hero the accomplishments of three Qans succeeding, Batu Möngke, Bayan Möngke and Bodialar. The Mongolian literatures, especially *Mêng-ku Yüan-liu* 蒙古源流, outlined legends, not the historical facts. Dr. *Wada's* opinion has a fundamental mistake in his arrangement of history based on legends.

## The Structure of Cotton Industry in Normandy Before the Industrial Revolution

by

Haruhiko Hattori

This article is to establish the structure of the French fibre industry before the industrial revolution, as a preparative work for analyzing the development of the industrial revolution in the very industry; which means that the economic structure in the 'manufacturing period' should be examined from the viewpoint of the industrial revolution, not from the former viewpoint of the bourgeois revolution. Limiting our consideration to the cotton industry in eastern Normandy till 1880's we examine, using the possible original sources, what form this industry took in both the privileged city of Rouen and its agrarian surroundings, and what structure of market supported its production; we will make it clear this premise must be a condition for the establishment of factory system and offer a certain comment to the accepted view especially about the character and part of the urban merchants and most weavers of guild.

## An Interpretation of the Political History in the 19 th Century England

by

Kenji Muraoka

In our academic world of historical researches, the history of the 19 th century England has, above all, been considered as a typical course of capitalist development, It has come to be a fixed prejudice that